
勝負師

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

勝負師

【コード】

N6021D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

勝負すべきかせざるべきか、それが問題であった。その緊張した中で彼が選んだ選択は。野球ものです。

第一章

勝負師

勝負時だった。それを見て取った。

彼はベンチで沈黙していた。その彼にコーチの一人が声をかけた。

「どうしますか？」

采配のことだ。それ以外にはなかった。

「勝負されますか、やはり」

「勝負か」

「あいつはそれを望んでいますけれど」

コーチはマウンドを見て言う。見ればエースがこちらを見ていた。

「勝負して打ち取りたいと言っていますけれど」

「そうだろうな」

言葉を聞かれた彼はそれに対して頷いた。このチームのエースは非常に負けん気が強い。決して逃げない男だ。それでファンの中でも人気のある男なのだ。男であると言われている。

「それはわかる」

「では勝負ですね」

それを聞いてコーチはまずはそう判断した。

「ここはやはり」

「いや」

だが彼はここでは即答を避けた。険しい目で球場全体を見ていた。そうして今は答えるのを避けたのであった。

「待て」

「待て、ですか」

「少し考える」

そのうえでこう述べた。

「どうするかな。しかしだ」

「しかし？」

勝負師

「勝つぞ」

それはもう心に決めていたことであつた。最初から。

「それはいいな」

「はい」

そしてコーチも彼のその言葉に頷くのだつた。

「それはもうわかつていますよ」

「この試合に勝てばそれで決まる」

彼はそれがわかつていたのだ。

「天王山って言葉があるな」

「それが今つていうことですね」

「勝負は。それに勝てるかどうかだ」

こはコーチに対してだけ言っているのではなかつた。自分自身に對しても言っている言葉であつた。

「それに負ける奴は勝負師じゃない」

「違いますか」

「百回負けてもいいんだ」

彼は次にこう言つた。

「肝心の勝負に一回勝てればな。それでいいんですか」

「歴史でもそんな話がありましたね」

「そうだつたな。中国の話だつたか」

「誰だかは忘れまじたけれどね」

コーチはそこまでは覚えてはいなかつた。しかし今が一体どういつた時なのかは監督である彼の言葉でよくわかつた。今はそれだけで充分であつた。

「それでしたら」

「勝つ為には何でもする」

それだけ彼は今この試合に全てを賭けていたのである。

「それだけだ。しかし」

「しかし？」

「次のバッターは最近絶好調だつたな」

「はい」

コーチは話が変わったのに合わせて彼の言葉に応えて頷いた。

「そうですね。今シーズンは好調ですが最近は特にです」

「しかも勝負強い」

彼の頭の中で次々と今打席に入るバッターのデータが出て来る。

それを照合させていって考えを巡らせていく。

「長打もある。パワーヒッターだ」

「特にこの球場では」

「抜群にホームランが多い。まあそれは向こうのホームグラウンド

だから仕方がないな」

「それもありますね」

そう、向こうのホームグラウンドだ。つまり地の利もある。これもまた大きかった。

第二章

「しかも風は」

「強いです。それに」

「コーチは今度は風の方向も見た。それは。」

「ホームからライトですか」

「右で引っ張りの強いあいつが派手に打つと」

風のその強さと向きをバッターの傾向と合わせる。

「センターにですか」

「少なくとも切れない」

「ファールにはならないということである。」

「尚且つあちらにとっては追い風だ」

「下手をすればスタンドですか」

「そうだったら終わりだぞ」

彼は言う。

「一点差でランナーが二人いる」

「長打でも逆転ですな」

「勝負強いあいつだしな。しかもだ」

頭から出て来るデータはまだあった。今度はこちら側のエースについてだ。

「あいつはうちで一番頼りになる奴だがな」

「あのバッターとの相性は悪かったですな」

「ずっとな。今シーズンだけじゃなくな」

ここでこれが言われた。

「ホームランもよく打たれていたな」

「大体三割以上は軽く打たれていますね」

野球ではかなり打たれていることになる。このデータが出て来て彼はまたその表情を暗く険しいものにさせるのであった。そうして次の言葉を出した。

「勝負できると思うか？」

「勝負ですか」

「あいつであるバッターにだ」

それをコーチに対して問うたのである。

「そこはどう思うんだ？」

「あいつはどう考えているでしょうね」

コーチはそれに答えずエースの方を見た。エースはまだこちらを見ていた。マウンドの上から。

「勝負したいでしょうかね」

「確実にな。そうだな」

彼はそれもわかっていた。こっちのエースの性格もはっきりとわかっていたので。

「しかしな。勝たなければいけないんだ」

「この試合は」

「そうだ。だからここは」

そして遂に決断を下したのであった。

「敬遠だ」

彼の下した決断はそれであった。

「次のバッターで勝負するぞ。いいな」

「敬遠ですか」

「そうだ」

コーチに対してはっきりと答えた。

「ここで打たれたら終わりだ。だからこそ」

敬遠のサインを出した。それを見たエースの顔が見る見るうちに険しくなる。彼を睨んでさえた。彼にもそれははっきりとわかっている。だがそれでも平気な顔をしていた。

「いいんですね、これで」

「ああ」

コーチに対してもはっきりと答える。

「これでいい」

「あいつは俺を信じていないのかって顔をしていますよ」
「信じているさ」

だが彼はこう答えるのだった。

「信じているからだ。次のバッターで勝負だ」

「次のバッターは確実に抑えられるからですか」

「そういうことだ。信じているから全ての勝負を任せるんじゃない」
彼の言葉であった。

「いざって時はそれを避けるものだ。信じているのならな」

「信じていればこそですか」

「信じているということは全てわかっているということだ」

彼はこれまでになく強い言葉を出した。

「それならここはこれだ」

「あえて敬遠ですか」

「それで勝つ」

言葉がここでさらに強くなった。

第三章

「この試合。そしてうちは優勝だ」

「優勝の為にもですね」

「さっき言ったな。どんなことをしても勝つと」

「はい」

それははつきり覚えている。あまりにも印象的な言葉だったから。

「それが今だ。それだけだ」

「それだけですか」

「安心しろ。これでうちの勝ちだ」

キャツチャァが立ったのを見てコーチに対して言う。

「これでな」

「時には勝負を避けるのも大事なんですね」

「勝負は何回でもある。さっき言ったな」

「ええ」

またこの言葉が出る。コーチはそれにも頷く。

「それにな。その勝負の中にも何度も勝負があるんだ」

「今はその中の一つですか」

「その中でも天王山だ」

また天王山という言葉を出してみせた。

「だからだ。ここでは負けるわけにはいかないんだ」

「それで敬遠ですか」

「打たれたら終わりだ」

これが彼の心を大きく支配していることであった。

「それを避けて勝つ。今はそれだ」

「そうですね」

「俺は間違っているか？」

ここまで話したうえでコーチに対して問うた。

「今の俺は。どうだ？」

「勝利を収めるということでは間違っていない」
「そうか」

「コーチの言葉に表情を変えずに頷いた。
勝負師としてそれでいいと思います」

「いいのか」

「はい、勝つ為には」

彼はそれでよしと監督に対して答えた。

「それもいいです。ですが」

「問題はあいつだな」

「ええ。納得するでしょうか」

「後でよく話す」

彼は監督として己の矜持を見せた。

「それもまた俺の仕事だ」

「そうですね。全ては勝つ為です」

その為には何でもする。それに従ったままでなのだ。それを説明するのにもまた監督としての仕事である。そういうことであつたのだ。

「それをわかってもらいましょう」

「この試合についても俺が話す」

彼はこうもコーチに告げた。

「どうしてここで敬遠したのかもな」

「そうされますか」

「マスコミの相手だな」

「はい」

この場合はそうなるのだ。それは言わずもがなであった。

「それもされますか」

「マスコミに話すのも監督の仕事だからな」

「監督も大変ですし」

「しかもただの監督じゃないからな」

彼の言葉がさらに強くなる。

「勝負師だからな。それは当然だ」

「勝負師だからですか」

「勝負師は己の勝負の全てに答えないといけないんだ」

それは彼の信念であった。監督というよりは勝負師のそれであったのだ。

「だからだ。今日もな」

「わかりました。それではそれも」

「これはな。優勝の後で話になる」

彼はそれもわかっていたのである。

「よく覚えておけよ」

「後でマスコミにこぼれ話で後々まで伝えますよ」

コーチはそれに応えて笑って告げた。

「この話は」

「そうしてくれ。是非共な」

「はい」

こうして二人のベンチでの話は終わった。彼の言葉通りチームは優勝し胸上げが為された。それと共にこの話は伝説になった。勝負師の伝説として。その詳細はやはりマスコミあらファンの間に広まり伝説になったのであった。それも後々まで。彼は監督を引退してからも何かあるとこの話をされた。そうしてそこでもニヤリと笑って言うのであった。

「勝負師冥利に尽きる話だぜ」

そういうことであつた。勝負師にとってはこれ以上ない喜びであつた。勲章ではなくとも。勝利を伝説にされることこそが最も喜びなのであつた。それが勝負師の証でもあつた。それを誇りにしていたのである。

勝負師

2
0
7
・
1
2
・
2
2

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6021d/>

勝負師

2008年11月7日08時26分発行